

Title	震災ボランティア活動と若者の宗教心の発達(第二回東日本大震災国際神学シンポジウム：パネルディスカッション「苦難に寄り添い前に向かう教会」)
Author(s)	岡村, 直樹
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10 : 78-105
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=4948
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

【第二回東日本大震災国際神学シンポジウム】

パネルディスカッション「苦難に寄り添い前に向かう教会」

震災ボランティア活動と若者の宗教心の発達

岡村直樹

1. 研究の出発点と意義

二〇一一年三月一日に宮城県牡鹿半島の東南東沖約一三〇キロメートルの海底を震源として発生した巨大地震は、日本における地震観測史上最大のマグニチュード九・〇を記録し、岩手県、宮城県、福島県の沿岸部を中心に未曾有の大災害をもたらした。警察庁によれば、二〇一二年八月二日の時点で死者は一万五八六八人、重軽傷者は六一〇九人、警察に届出があった行方不明者は二八四八人で、また被害額の総計は二〇兆円を優に超えるであろうとも言われている。そのような中、社会福祉法人全国社会福祉協議会は東北三県各地のボランティアセンターに登録したボランティア活動従事者の延べ人数は、震災より約五カ月後の二〇一一年八月二日の時点で六八万六八〇〇人に達したと発表した。震災からの復興が、ボランティア活動によって広く支えられていることがわかる数字である。一方で、同年六月三〇日付けの産経新聞では、その時点での東日本大震災のボランティア活動における学生ボランティアの占める割合が約二割で、阪神淡路大震災時の六〇七割と比べて非常に低いことが伝えられている。时期的な要因や地域的な違い、ま

た特に震災直後に起こった原発事故の影響等がその理由として考えられるが、大学生のボランティア活動はもつと奨励されてしかるべきではないかという意見が各所から聞こえてきている。そのような声とは裏腹に、本研究の研究者が教鞭を執る東京基督教大学をはじめ、多くのキリスト教系大は、震災後の早い時期より、積極的に学生をボランティアとして被災地に送り届けたのも事実である。当然のこととして、ニュース報道等を通して被災地と被災者に様々なスポットライトが当てられる中、ボランティア学生を送り出す側の人間である当研究の研究者が、あまり注目を浴びることのない、送り出された学生の現地での体験や、彼らの心の中に起こった変化等について興味を持ったことが、本研究が始められるきっかけとなった。本研究は以上の背景をふまえ、質的研究の方法、特にグラウンデッドセオリーを用い、東日本大震災の被災地にボランティアとして入った東京基督教大学の学生の体験の記録とその分析を通し、以下の三つの目標に向けて実施された。

- ① 歴史的大地震の被災地にボランティアとして足を踏み入れた学生の生の声を記録し、資料として残す。
- ② ボランティア活動に従事した学生に起こった内面的変化を、宗教性や信仰心の「発達」という観点から分析する。
- ③ キリスト教教育の観点から、震災ボランティア活動の意義を検証する。

本研究は、現時点に至るまで、比較的取り上げられることの少ない、ボランティア学生の体験と、それに伴う内面的変化に焦点が当てられている点、またキリスト教教育におけるボランティア活動の意義を考察するという二点において、意義があると思われる。

2. 研究方法と研究対象者

本研究は、Michael Quinn Patton の著書『*Qualitative Research and Evaluation Methods*』に記述されたグラウンデッドセオリーのガイドラインに沿って実施された⁽¹⁾。グラウンデッドセオリーは、アンケート等を通して量的なデータを収集し、それらを数的に分析する、いわゆる量的研究とは異なり、対象者を広く浅く学ぶのではなく、研究対象者や対象とする様々な現象を深く掘り下げ、より狭く、より深く学ぶことに焦点を当てた質的研究に属する研究方法である。グラウンデッドセオリーは、量的に表すことの難しい宗教心、信仰心、感情、心の動き、対人関係といった分野において、特にその力を発揮する研究方法論であることが近年認められつつある研究方法論であり、それはデータ収集、データ分析、理論構築という三つの主な段階から構築されている⁽²⁾。また質的研究では、より質の高い研究の実施に向け、データの収集、およびデータ分析にTriangulationの方法が用いられることが多い。Triangulationとは、多角性を表す言葉で、それは様々なアングルからのデータ収集と、同様のデータ分析の必要性を表している。本研究では、研究参加者の個々のリアクションや、グループディスカッションの内容に着目した多角的なデータ収集が行われ、同時に、人間の内面性の表れでもある非言語コミュニケーション⁽³⁾、すなわち研究対象者の語調、顔の表情、体の動き、視線等もが重要なデータとして記録された。データ収集後、研究者は理論の構築に進むために、データ分析を通じて様々なカテゴリー（まとめ、または概念）を生成し、それらを組織化していくこと、言い換えれば、収集されたデータを一端バラバラにし、新しく組み替えて再構築する作業を実施した⁽⁴⁾。その後の分析もやはりTriangulationの方法を用い、宗教学、社会学、心理学という、複数の観点からなされた学術研究結果を参考にしつつ実施された。

質的研究方法に属するグラウンデッドセオリーは、非常に限られた地域で、限られた人数を対象にして行われているため、研究の結果を直ちに広く一般化することができるという性質の研究ではない。さらに時の流れとともに、研究対象者もまた研究対象者を取りまく社会も変化することから、研究結果の実際の有効期間も様々である。質的研究の方法は、量的研究が取り組むことを躊躇する領域に足を踏み入れ、現場に根ざした質的なデータを重視し、リアリティをもつてそれらを詳細に記述することを通して、現象の本質を追い求めることをその本分としている。質的研究の結果は、量的研究のそれと対比させ、二項対立の図式の中でその優劣が競われるべきものではなく、研究の目的を果たすためにあらゆるデータを活用するというスピリットの中で、説得力を持つ実践的な取り組みの手掛かりとして活用されるべき類のものであろう。⁽⁵⁾

本研究の初期段階で研究対象者となったのは、東日本大震災のボランティア活動に加わった大学生二三名で、研究者が教鞭を執る東京基督教大学において募られた。まず、彼らにボランティア活動について簡単に記述してもらい、その中から、均質サンプリング (Homogeneous Sampling) 方法のガイドラインに沿って研究対象者が絞り込まれた。⁽⁶⁾ サンプリング (Sampling) とは量的研究のように大人数を研究の対象とすることのできない質的研究において、より意図的 (purposeful) に研究対象者を選択しようとするプロセスを指す言葉である。均質サンプリングとは、いくつかの共通条件をつけて研究対象者を絞り込むことで、一定のサブグループをより深く知ろうとする際に頻繁に用いられる方法である。今回均質サンプリングの方法を用いて選択されたのは、東京基督教大学に在籍する二年生と三年生の九人 (男性三名、女性六名) で、そこには以下の五つの共通点が存在する。

- ① 今回初めて災害ボランティア活動に参加した学生であること。

- ② 震災以降、五〇日以内に、ボランティア活動に参加した学生であること。
- ③ ボランティア活動の場所は、岩手県、宮城県、福島県（東北三県）のいずれかであったこと。
- ④ 実際に被災地を目の当たりにし、また被災者とのコンタクトがあったこと。
- ⑤ ボランティア活動終了時から一カ月以上が経過していること。

本研究の初期段階で研究対象者となった学生の中には、以前「阪神・淡路大震災」や、他の自然災害においてボランティア活動に参加した学生が見受けられた。研究参加者の共通条件を①としたのは、以前の自らのボランティア体験と今回の体験を対比させる形での考察を促すのではなく、学生にとって初めての災害ボランティア活動に限定したデータを収集する意図からである。研究参加者の共通条件を②③④としたのは、震災の爪痕が色濃く残る時期に、特に被害が甚大であった地域で、実際に被災者とふれあった体験を持つ学生からのデータを収集する意図からである。研究参加者の多くは、大学主催によるボランティア活動に参加した者であるが、別団体が主催したボランティア活動に参加した者も複数いた。研究参加者の共通条件を⑤としたのは、研究参加者の宗教性や信仰心の変化に焦点を当てるといふ本研究の性格上、学生がボランティア活動から戻った後、しばらく時間が経過しており、その間の変化をデータとして収集するという意図からである。九名のボランティア活動後の実際の経過期間は、最長で約二カ月、最短で一カ月であった。以下に本研究に参加した学生のボランティア活動に関する基本データを列記する。

学生（Ａ） 日程…三月下旬～四月初旬、場所…東松島市、南三陸町、内容…ドロの掻き出し、家具出し、炊き出し、支援物資の配布

学生（Ｂ） 日程…四月下旬～五月上旬、場所…仙台市、内容…ドロの掻き出し、石灰撒き

学生(C) 日程… 三月下旬～四月上旬、場所… 東松島市、内容… ドロの掻き出し

学生(D) 日程… 四月中旬、場所… 福島県いわき市、内容… 炊き出し

学生(E) 日程… 三月下旬、四月中旬、場所… 東松島市、石巻市、内容… 後片付け、ドロの掻き出し、救援物資の仕分け、炊き出し

学生(F) 日程… 三月下旬～四月上旬、場所… 東松島市、石巻市、内容… 物資の運搬と配給、炊き出し、ドロの掻き出し

学生(G) 日程… 三月下旬～四月上旬、四月下旬～五月上旬、場所… 仙台市若林区、東松島市、南三陸町、内容… 水の運搬、倉庫の整理、救援物資の仕分け、ドロの掻き出し

学生(H) 日程… 四月上旬、場所… 仙台市、女川町、内容… 支援物資の運搬

学生(I) 日程… 四月中旬、場所… 東松島市、内容… ドロの掻き出し

インタビュー、および小グループディスカッションでは、宗教心の変化に関するデータを収集するという意図から、ボランティア活動の「出発前」、「活動最中」、「その後」という時間の経過と、それに伴う変化を軸に質問を作成し、時系列でのデータ収集を試みた。グラウンデッドセオリーでは、研究者が自らの予見に頼らず、研究対象者ができる限り自由に、また正直に語ることができるよう心がけつつ、質問の内容や、話しの導き方をオープンに保つことが要求されるが、本研究ではPattonのガイドラインに従い、Open-ended Interview Questionを用いてできる限り自由に発言することが促された。インタビュー、および小グループディスカッションにおいて、下記の三つの質問が基本形として用意された。⁽⁷⁾

- ① 「震災ボランティア活動に参加しようと思ったきっかけや理由について自由に述べて下さい。」
- ② 「被災地での体験を通して、どのような感想を持ちましたか。自由に述べて下さい。」
- ③ 「ボランティア活動から戻って、自分にどのような変化がありましたか。自由に述べて下さい。」

インタビューとディスカッションにおいては、上記の質問への自由な返答に対して、「それはどういう意味ですか。」「もう少し詳しく話して下さい。」といった答えの明確化を促す質問をフォローアップとして行った。行動観察では研究参加者同士の会話や研究者とのやりとりの中で、本研究に関連性があると思われる非言語的なコミュニケーション、すなわち、語調、言葉の抑揚、表情等が記録された。また本研究では、誘導的質問を避け、自主的発言を促すという観点から、宗教的な事柄に対する発言を意図的に促す質問は用意されなかった。研究参加者にはできるだけ自由に、そして何でも語ることが促されており、その内容はすべて彼らが自主的に選んだものである。

3. 結果

本研究のデータ収集が実施されたのは、二〇一一年六月一四日から二三日の間で、場所は本研究の研究者が所属する大学の食堂、および教室である。インタビューやディスカッションの内容は、研究参加者の了解を得て電子レコーダーに記録された。音声データは研究者が文字に起こし、その回答の内容、頻繁に繰り返された言葉、また感情を込めて語られた言葉、といったカテゴリーを用いて分け、さらにコーディング法を用いてさらなるデータの細分化と生成を試みた。以下に収集されたデータから導き出された結果を六つの項目に分けて列挙する。

(1) まず「震災ボランティア活動に参加しようと思ったきっかけや理由について自由に述べて下さい。」という質問の答えから、研究参加者の多くに共通する、ボランティア活動参加のきっかけや理由が浮かび上がってきた。それらが大別すると、第一は、「何かしたい」、「何かしなければならぬ」という強い気持ちが起こったこと、第二は、被災者の身に起こっていることを実際に見てみたいと思う欲求が起こったことであつた。具体的には以下のような言葉が語られた。

「テレビに映る被災者の様子を見て、行かすにはいられなかつた。」

「同じ日本人が苦しんでいるのを見て、放っておけなかつた。」

「震災の様子をテレビで見て、このことを人ごとにしたくないと感じた。」

「クラスメートがボランティアに行くのを見て、私も行かなくてはいけないと思つた。」

「友人が積極的に募金活動に奔走するのを見て、自分は現地に行きたいと思つた。」

「かわいそうと思うだけではなく、実際に行動すべきだという友人の発言に触発された。」

「私にできることが何かあるのではないかと思つた。」

「自分たちでやれることは何だろうと、真剣に考えた。」

「被災地の人の苦しみを体感したいと思つた。」

「どのような困難や苦しみがあるかを知れると思つた。」

「実際に被災者の様子を見て、同じ苦難を体験したいと思つた。」

「被災地の人の苦しみをリアルに体感したいと思つた。」

「実際の被災者の状況をこの目で見てみたいという思いもあった。」

「被災地のためにできることを現地で実際に知りたかった。」

「ニュースで見るあの悲惨な場所を自分の目で見てみたいと思った。」

研究参加者の多くに「何かしたい」、「何かしなければならぬ」という強い気持ちが起こった引き金として多く挙げられたのは、テレビに映る被災者の苦しみの様子や、震災に関する友人・知人の行動や言葉等であった。被災地で実際に「見たい」「知りたい」「体験したい」ことの対象としては、被災者が直面する厳しい現状が最も多く挙げられた。研究参加者の多くをボランティア活動へと押し出したのは、被災地の物質的状況というより、被災地の人間的状況に結びつく事柄であると言うことができるかもしれない。またボランティア活動に参加することを決断した際の思いについて、以下のようなコメントも聞かれた。

「原発の問題もあったので、被爆し、健康に害が加わることも覚悟した。」

「身の安全は保障されていないということを覚悟した。」

「生活は不自由になるだろうと覚悟した。」

「周りの反対を押し切って行つたが、賛同してもらえなくとも良いと思った。」

研究参加者の多くは、かなりの覚悟をしてボランティア活動に参加したことがわかる。彼らの多くが抱いた「見たい」「知りたい」「体験したい」という欲求は、ただ単に彼らの自己中心的な好奇心の欲求を満たすだけでなく、彼らの持つ「被災者のために何かできることをしたい」と思う強い気持ちを実行に移すためにも、まず「見たい」「知

りたい」「体験したい」と思った、ということが出来るかもしれない。

(2)被災地の人のために何かしたいというモチベーションに押し出されて、東北三県に向かった研究参加者を待っていたのは、想像を絶する光景であった。津波によつてできた瓦礫の山や、何百人もが一カ所に身を寄せる避難所の様子を彼らは以下のように言い表している。

「先に被災地に行った人から『言葉にならない』という感想を聞き、自分は違う感想を持つのではないかと思つたが、やはり実際言葉が出ないほど驚いた。」

「本当にこれが現実なのかあとと思つた。」

「そこに広がっているのは、ファンタジーの世界の光景なんじゃないかなあとと思つた。」

「始めは車から惨状を見て、夢なのではないかと思つたけど、実際に車から降りて、特に魚の生臭いにおいを嗅ぎ、ああ、本当に現実なんだと感じた。」

「南三陸町の惨状を見て、絶句した。言葉が出なかった。異様な雰囲気だった。」

「この静かな海が、本当にこんな惨状を生み出したことが信じられなかった。」

「自分の見た光景が理解できなかった。」

「こんな状況を自分の目に入れることになるとは思っていなかった。」

「そこに自分がいることが不思議だった。」

「ボランティアの作業をしながらも、自分がそこにいることを受け入れられなかった。」

「体育館で避難生活をしている人々を見て、それが現実だとはなかなか信じられなかった。」

「もし自分が直接この被害を受けていたら、きつと耐えられなかっただろうと思った。」

研究参加者の多くは、被災地の様子に大きなショックを受け、被災地訪問から一カ月以上経った時点でも、言葉を用いてその時の状況や、自らの思いを説明することに困難を覚えているようであった。

(3) インタビューやディスカッションの中で、想像を絶する被災地の光景と同等に感情を込めて語られたのは、目の前に広がる悲惨な光景の中でボランティアとして動く自分自身のあり方や自分に対する思いに関する感想であった。

「行く前は、被災地についたら、さつとするべき事を始めようと思ったけど、実際に多くの被災者の姿を見て、足がすくんで立ち尽くしてしまった。前に進めず、考え込んでしまった。」

「あまりの被害の大きさに、私なんかが、ちよつと手伝うことに意味があるのかなと思った。」

「何か役に立てるんじゃないかなと思っていたけど、自分の働きは本当に役に立つのか疑問を持った。」

「被災した人たちの悲しそうな目を見たが、あまりのショックの大きさにかわいそうとか、説明できるような感情は出てこなかった。」

「自分には何ができるだろうと思ったが、何も見いだせなかった。」

「ボランティアに行く前は、色々やりたいと思っていた自分の浅はかき、愚かさに気がついた。」

「(ボランティア活動期間の)五日だけで疲れてしまった自分と、二カ月も避難所生活をしている人を比べて、がっかりした。自分はよわいなあと感じたし、悲しかった。」

「ドロ出しのボランティアをした家の住人に対し、本当に大変だなあ、辛いんだなあと感じつつも、ベースキャンプに戻ってシャワーを浴びたいと思う自分がとても小さく思えた。」

「安全な時に安全な場所から災害の様子を見る自分に対し、自分は何様だろうと感じ、申し訳ないと思った。」

「自分は何もできないということ、それだけを学んだ気がする。」

「自分の欲望がすべて罪深いことのように思えた。」

「何かできると思ってたが、作業も進まず、自分に何もできないことを思い知らされた。」

「ひとりのおばあさんが、家の瓦礫の中で何かを探しているのを見て、「何かお探しますか。お手伝いします。」と軽く言ったら、『だんなの死体を探しています。』と言われ、返す言葉がなかった。苦悩のレベルの違いを感じ、また自分は本当に傲慢だったと思う。」

「自分が東京で持っていた不平や不満は、被災者の苦しみに比べたら何でもないと思った。」

「被災した人と同じ気持ちを感じると思ってたけど、実際行ったら、まったくレベルが違い、到底それを感じることとはできないと痛感した。」

「自分には家があるし、ご飯も食べようと思えば食べれるし、家族も傷ついていないし、基本的な必要は満たされているから、ボランティアに来ることができたんだなあと痛感した。」

「家も流され、何もない人の苦しみを味わうことなんて不可能だと思った。」

「被災者に対して『大丈夫ですよ。』などという言葉を軽々しく使えないと思った。」

「高齢の被災者が、もう死んだ方がましと言っていたが、返す言葉がまったく見つからなかった。気軽に答えることはできないと思った。」

研究参加者の多くは、被災地ボランティアという活動の中で、自らの能力や技量を再認識し、そのことを通して自分の実状を直視することを、ある意味「迫られた」と感じたようである。またそれは、例えば、「自分は何もできないということ、それだけを学んだ気がする。」という言葉に代表されるように、「自分も何かしたい。」「被災者の苦しみを共有したい。」といった思いを胸に、意気揚々と被災地に乗り込んだ自らの「甘さ」や「安易さ」に対する反省という意味合いが強いように思われた。

(4)「ボランティア活動から戻って、自分にどのような変化がありましたか。自由に述べて下さい。」という三つめの質問に対して最も多かった答えは、上記の結果(3)と同様、自責の念を含むものであった。東北三県から戻って一カ月以上が経過した時点で、多くの研究参加者は、被災地での体験の鮮明さや、被災者に対する思いが薄れつつあると感じ、それに対してフラストレーションを感じているようであった。

「もう帰ってきてから二カ月経つんですけど、だんだん被災地の体験が薄れてきてしまっている自分がいる。」

「今も避難所生活をしている人がいるのに、私は普段の生活に普通に戻っている自分がいやだ。」

「被災地の人の苦しみ、それを感じた自分を忘れたくないという思いがある。」

「被災者のための祈りが、最近ありきたりになってきている感じがする。祈る思いを忘れてしまう時もあり、反省する。」

「帰って来てたつた二カ月なのに、もう一〇〇だった被災地への思いが三〇くらいになっていて、結局自分は自己中心だなあと思う。」

「満足な物資がない中で食べたおにぎりの味がすごくおいしかったのを思い出す。いつも食べるおにぎりとは、

おいしきも、喜びも違った。でも帰ってきて、二カ月経って、普通に感謝なく食事するし、自分の事しか考えていない自分がいて、自分の変わりようには驚いた。がっかりする。」

「ボランティアをした時に書いていた日記を見直すと、その時の自分が震災についてとても強い思いを持っていたことがわかる。でも今は、震災の重要度も自分の中で下がってきているなあと感じ、それがいやだ。」

研究参加者の多くは、被災地でのボランティア活動の中で受けた様々なショックが、時間の経過と同時に徐々に薄れつつあることに、大きな危機感を感じているようであった。同時にそのような変化を通して自らの弱さを認識し、それを強く反省しているように思われた。

(5) 「ボランティア活動から戻って、自分にどのような変化がありましたか。自由に述べて下さい。」という三つめの質問に対して(4)と同様に多かった答えは、ボランティア活動を通して得た、物事に対する新たな観点(「以前は〇〇と思っていたが、今は〇〇と思う。」という表現が多用された。)に関するものであった。具体的な内容は様々だが、「以前はあまり目を留めなかったこと」「以前はあたりまえと思っていたこと」等に対して、上記の結果(3)(4)に対するのと同じように、自戒の念も込められた表現を用い、それらが「改められた」と語られることが多いように見受けられた。

「日常生活で起こる様々な出来事ひとつひとつに、小さな喜びを見いだし、この限りある地上での生活の中で、それを楽しんでもいいんだと思うようになった。」

「震災前は、水道が出たり、電気がついたり、道路が平らなのも当たり前と思っていた。そういう当たり前が当

たり前ではないと思うようになった。あたりまえのものが、じつは崩れやすいものだということに気がついた。人間が作り上げてきたものが、たとえば新宿の高層ビルなんかも、じつはもろいものなんだと感ずるようになった。」

「色々なことに目を向けなければいけないんだあとと思うようになった。震災も大変だが、世界の他の国々にも多くの苦しんでいる人がいるという現実にも目を向けなくてはならないと思った。」

「家に帰ってから節電を心がける私に、原発事故の影響を直接受けていないここで節電しても、被災地の役には立たないよと家族から言われたことに対し、電気を消すことより、それを気にかける心が大切だよと訴える熱い私がいることに気がついた。」

「この震災で亡くなったと同じ数の人が、毎年自殺という形で亡くなっていることに気がつき、被災地で苦しんでいる人もたくさんいるが、自分の周りにも苦しんでいる人はたくさんいるんだあと強く思わされた。被災地でもそうだが、自分の周りの苦しんでいる人に目を向けることの大切さに気がついた。」

「様々な社会問題に対して無関心なスクールメートに、世の中にはそれらで本当に困ったり苦しんでいる人がいるという現実を目を向けて欲しいと思うようになった。」

また研究参加者の得た「新たな物事の新たな見方」は、実は被災地でのボランティア活動の最中に気がつき、今に至るまでそれを持ち続けているとする言葉もあった。

「ボランティア活動のベースキャンプでの留守番を任せられ、現場に出て行かないことに不満を感じたが、留守番をしながらの皿洗いや仕分け作業も大切な活動の一部だということを思われ、現場に出て行った人たちのた

めのそのような働きも大切だと思い、小さなことにも意味を見いだせるようになった。」

「ドロの中にあった球根から芽が出て、スイセンが咲いていたんですけど、そんな些細なことに感動する自分がありました。神が造った自然がそこにあることに感動したんだと思います。」

また自らの持つていた宗教観の変化に関する言葉もいくつか見られた。

「被災地に行く前は、神は愛であり、すべての事が神の愛から出ていると確信していた。被災地から帰ってきて、神は愛であるという信念は変わらないが、そのことを簡単に口に出したり、そのことを安易に祈ったりするべきではないと思うようになった。」

「被災地での祈りの中で、神様の計画とか、神のみこころという言葉が、まったく使えなかった。以前は、そういった言葉を頻繁に使っていたけれど、物事をあまり深く考えずに使っていたと思う。」

多くの研究参加者が新しく得た観点（ものの見方）の具体的な内容は多様だが、それらは彼らの「価値観」や「世界観」の大きな変化につながる内容であるように思われる。

（6）研究参加者の全員に、質問の（3）へのフォローアップとして、ボランティア活動後にどのような「振り返り」の機会があったかを尋ねた。「友達や家族と少し話した。」「自分の中で反省した。」「といった答えは多くあったが、「ボランティア体験を振り返る」という目的をはっきりと設定し、きちんと時間を確保した上でのグループディスカッションやインタビューの機会はなかったと答えた。また本研究のインタビューとグループディスカッションに対する感想を

求めたところ、以下のような返答があつた。

「インタビューの質問で、色々な感情や思いが引き出された。」

「自分が自分の体験を口に出して話すことによって、自分の考えがはっきりした部分もあつた。」

「ボランティア体験について、感覚的な記憶はあるけれど、それを口に出して伝えるのは難しいと思つた。」

「グループのほかの人の話から、教えられたことがたくさんあつた。」

「人の言っていることを聞いて、自分の思いとの相違点や、思い出したことや、気がつかされたことが多くあつた。」

「ボランティア体験の内容は似ていても、そこから受け取ることや考えること、学ぶことは人それぞれなんだなあと思つた。ああ、そうなんだと思うこともあつた。」

「被災地のことを忘れないように努力している人の話を聞いて、私もそうしようと思つた。」

本研究を通して、はじめて自分に起こつた変化に気がつき、自分の思いが明確化されたと語つた参加者も多くあり、またインタビューやディスカッションが有意義であつたと語つた者も同様に多かつた。

4. 分析

収集されたデータ、およびそこから浮かび上がった結果を分析するために、本研究では、宗教学、社会学、心理学と

いう、複数の観点からなされた学術研究結果がその参考とされた。これは、より多角的な、より精度の高い分析を目指し、質的研究におけるTriangulationの方法を用いて実施されたものである。以下にそれらの分析の結果を、「ボランティア活動への参加理由」「危機体験と宗教心の変化」「宗教性、信仰心の発達」「現象学的教育方法のメリット」という四つの項目に分けて記述した。

(1) ボランティア活動を、社会心理学の観点から研究するDavid GeraldとLouis A. Pennerは、様々な人間がボランティア活動に足を踏み入れる経緯を調査、分析し、それを「determinants for volunteer work：ボランティア活動（参加）を決定付ける要素」として以下の四種類の形態（model）に分類した。⁽⁸⁾

- ① role-identity model：社会奉仕活動が属するグループの強いアイデンティティーである場合
- ② values and attitudes model：社会奉仕活動の必要性に対して強い信念を持つ場合
- ③ volunteer motivations model：自らのスキルアップや自己充実のための社会奉仕活動である場合
- ④ volunteer personality model：純粋に人を助けたいと強く感じる場合

ボランティア活動に従事する者は、必ずこれら四つのモデルのどれか一つにだけ当てはまるということではなく、複数の要因の中で、どれか一つが最も強い場合が多いことをGeraldとPennerは強調する。本研究に参加した大学生が、震災ボランティア活動に挑むきっかけとなったのは、「被災者の苦しみを他人事としたくない」、「被災者の苦しみを知ることによって彼らを助けたい」、といった強い思いからであったことはすでに結果（1）で述べたが、それを見る限り、彼らの多くは、GeraldとPennerの提唱する四つのモデルの二番目と四番目、特に四番目の「volunteer personality

model」：純粹に人を助けたいと強く感じる場合」に最もよく当てはまるのではないかと思われる。⁽⁹⁾ 残念ながら本研究によつて収集されたデータからは、なぜ彼らが当初そのような思いを持っていたのかという理由までを窺い知ることはできないが、本研究で記録された様々な内面的な変化は、被災者に対する同情心や、震災への危機感を持った学生の、主体的な判断に後押しされたものであったという事実の特筆すべき点であると思われる。

(2) 本研究の参加者は、被災地で彼らが目にした光景を、「口では言い表せない」「信じ難い」という言葉を使つて伝えようとし、さらには「異様な光景」「絶句した」「不思議だった」「ファンタジーの世界」といったフレーズも飛び出したことは、研究結果(2)で記した。このような日常を越えた震災危機体験は、どのような宗教的インパクトをもたらすものであろうか。社会心理学者で、宗教回心論を専門とする Lewis R. Rambo と Charles E. Farhadian は、危機(crisis)によつて個々に生じる宗教的变化を「危機によつてもたらされる無秩序と混乱は、個々がそれまで『当たり前』と思つていた世界観に疑問を投げかける役目を果たすものである。」と説明する。⁽¹⁰⁾ また Rambo は、危機を、外的な危機と内的な危機の二種類に分類する。内的な危機は、体や精神の病、個々の考え方の変化に起因し、外的な危機は、政治的变化や天変地異、さらには人間関係の変化等の人間的な要因もそこに含まれるとし、危機を通して個々の日常に鋭く投げかけられた疑問に対して、それぞれがどのような態度で臨むかによつても、宗教心の変化に大きな違いが現れると彼は主張する。⁽¹¹⁾ ある者は、疑問に対して消極的な態度を示す。その場合、大きな宗教心の変化が起こることは少ない。ある者は積極的にその疑問に対する答えを模索しようとする。その場合、その過程で世界観が変化し、それが宗教的回心につながる人が多いとされている。

宗教教育学者で、若者の宗教性を専門に研究する Steve Forbais は、危機体験について以下のように述べている。「発達論の立場から考えて、危機体験は、若者が成長した宗教性を持つに至るプロセスの中で、非常に重要な位置を占める

ものである。多くの若者は、危機体験を意図的に避け、それによって（ポジティブな）宗教性の成長の機会を逃してしまうのである⁽¹²⁾。FortosisはRanbo同様、若者の危機体験を、宗教性のポジティブな変化と結びつけ、それを宗教的成長の好機として位置付けている。

日本人の若者を対象にした研究としては、本研究の研究者が二〇〇九年に米国の宗教教育学会の学会誌 *Religious Education* で発表した、米国のキリスト教系大学に在学する日本人大学生の宗教心の変化に関する調査が存在する。ここでは、留学中に起こった様々な内的危機体験が、研究参加者の宗教に対する思いに大きな変化をもたらし、またそのことによって、宗教に対するネガティブな感情が、ポジティブなものに変わったという研究結果の報告がなされている⁽¹³⁾。

本研究の参加者はどうかであろうか。まず彼らは、東日本大震災という危機に対して、ある意味自分の身の安全や、自分の時間を犠牲にして、そこに積極的に足を踏み入れた若者たちであると言える。また自分が置かれた危機的状況の中で、彼らの多くは、そこから投げかけられる大きな疑問を、自分自身の問題として受け止め、結果（3）（4）にも記されているように、「思い知らされた」「傲慢だった」などという言葉を用い、新たにされた自らの思いを説明している。本研究に記録された事柄の中で、宗教に関する直接的な言及の占める割合は比較的小さかったが、震災ボランティア活動は、少なくとも上記された社会心理学や宗教教育学の立場から、彼らにとってポジティブな宗教的变化をもたらす可能性を内包する「チャレンジ」であったと言えることは確かであろう。

（3）次に、上記された宗教性のポジティブな変化について、それを「成長」や「発達」といった側面から、さらに具体的に分析する。米国における宗教心理学研究や宗教教育学研究に多大なる影響を与えたEmory UniversityのJames W. Fowler¹⁴⁾、Erick Ericksonの心理発達論や、Lawrence Kohlbergの道徳発達論のモチーフに基づき、独自

の faith development theory (信仰発達論) を構築したことでも有名である。彼はキリスト教神学者の Paul Tillich や、H. Richard Niebuhr の人間理解に習い、「信仰」を「超越者との関係性に関して、全ての人間の持つユニバーサルな要素」として扱い、さらに「信仰」の成長と「心理的」な発達を区別せず、一つの発達の枠組みの中に両者を入れて理解することを提唱した。Fowler のユニークさは、「心理的発達」の概念を宗教の領域に受け入れたのと同時に、「信仰の発達(成長)」の概念を個別の宗教の閉鎖的な枠組みから取り出したことにあると言えるだろう。Fowler の信仰発達論は現在も欧米の宗教教育研究におけるひとつの重要なセオリーとされている。以下は、彼の提唱する信仰発達論の段階(stages) である⁽¹⁴⁾。

第一段階 「Intuitive-Projective faith: 直感的信仰」…子どもが親の「目に見える信仰の形」を直感的に模倣する。自らの信仰に対する論理的な考察はない。

第二段階 「Mythic-Literal faith: 神秘的で文字通りの信仰」…現実と非現実を識別し、親以外の「信仰の形」を受け入れることができる。しかし物事を抽象的に考えることはできない。

第三段階 「Synthetic-Conventional faith: 模造された紋切り型の信仰」…家族や友人といった自分の周囲にある大切なグループや権威に自らを合わせる形で信仰を形成する。理論的な考察は浅く、物事を短絡的に考える傾向がある。

第四段階 「Individuative-Reflective faith: 個人的で熟考された信仰」…グループや権威による信仰の形を批判的に見ることが可能。自主的な信仰の形成を試みるが二者択一的な理論展開が多い。

第五段階 「Conjunctive faith: 関連性、関係性を重視する信仰」…信仰の自主性に限界を感じ、他者の異なる主張や、逆説的なメッセージに理解を示す。相対主義的にはならず、自らの信仰の形を大切にしつつも、異者との

対話や共存の可能性を探る。

第六段階 「Universalizing faith: 普遍的信仰」… 真実の多元性や逆説性に対する迷いと共に自我を捨て、神の意志に

身を任せ、社会貢献に尽くす信仰の形。

Fowler の信仰発達論によると、高校生世代から大学生世代（二六―二七歳から二一―二二歳）は、ちょうど第三段階と第四段階の狭間に位置する。第三段階の信仰は、重要な周辺他者に強く依存する形で成立し、第四段階の信仰は、そのような他者の影響から離れ、自主的な信仰の形成を目指すものである。例えば自らが属するコミュニティの中の重要人物（先生、親、先輩等）から強い影響を受け、その信仰の形を模倣していた若者が、様々な世界観や価値観の課題、また自らのアイデンティティーの課題に自主的に取り組むことができるようになるのが、第三段階から第四段階への変化なのである。この変化は、青年期に訪れることが一般的である一方で、大人になっても第三段階の信仰で止まり、前に進まないケースも多々見受けられることも指摘されている⁽¹⁵⁾。

ではFowlerの語る信仰の第三段階から第四段階に進むには、いったい何が必要とされるのだろうか。個々の若者の静かなセルフ・リフレクションを通して起こるケースも想定できるが、多くの場合それは既存の世界観や価値観が揺り動かされる体験を通し、それまで当たり前と思っていた物事に対して疑問を持つような場面で起こるとされている⁽¹⁶⁾。それは分析（2）で触れたRanboやFarhadianの危機体験にまつわる宗教的变化に関する記述と相容れるものである。

ここで本研究の参加者の体験をもう一度見てみたい。ボランティアとして自分が置かれた状況の中で、彼らの多くは、そこから投げかけられる大きな疑問を敏感に感じたようである。結果（5）にも記されているように、彼らの多くは、それまで大きな疑問を持つことなく受け入れていた事柄や、「当たり前」と思っていたものの見方が、実はそうではなかったという結論にたどり着いている。研究結果（3）（4）からは、参加者の多くに、自らの「足りなさ」や「弱

さに」直面し、それを繰り返し反省する様子を見ることができ、このような内省もまたFowlerの語る信仰発達が起こったあかしであると言えるかもしれない。

Fowlerが参考とした心理発達論を展開する発達心理学者のEric Ericksonは、Fowlerの第三段階と第四段階の狭間にあたる時期に、「同一性対同一性拡散」という心理的危機が訪れると主張する。同一性とは「自分は何者か」「何を信じるのか」といった問いかけに対する答えを中心とするものであり、言い換えれば自分のアイデンティティーを探す旅に出る時期と言うことができ、またこの時期の重要他者は権威者からpeer（同年代の若者）に移行するのである。⁽¹⁷⁾ インタビューやディスカッションの最後に、「グループのほかの人の話から、教えられたことがたくさんあった。」「被災地のことを忘れないように努力している人の話を聞いて、私もそうしようと思った」といったコメントが多く聞かれたことについては結果(6)で記したが、ボランティア活動を引き金に得た新しい世界観や価値観には、peerの影響を受けて形成された部分もあったことが見受けられる。

今回の研究結果のみから、研究参加者の信仰(Fowlerの定義する「広義」の信仰)が、Fowlerの語る信仰発達の段階を上(第三段階から第四段階に)進んだという確固たる結論に至ることは難しいが、彼らの多くにとつて、ボランティア体験は、少なくともFowlerの語る信仰発達の段階を上る足がかりになりうるものであったと言えるのではないだろうか。研究参加への今後の追跡調査が実施されれば、さらに具体的な宗教心の変化や信仰の成長の様子を見ることが可能かもしれない。

(4) 研究参加者たちが、本研究で用いられたインタビューやグループディスカッションという方法そのものに対して、非常にポジティブな感想を持ったことについても言及する必要があるだろう。研究者は今回の研究過程において一切、研究対象者に対して自らの意見を述べることも、助言をすることもなかったが、彼らの多くは今回の研究が、自ら

のボランティア体験を深く、また客観的に振り返る良い機会であったとコメントしている。

本研究で用いられた質的研究は、人間の生きた経験 (lived human experience) の本質を記述し、それを研究することを目的とするという点において、Husserl により提唱された現象学にその起源を見いだすことができる。ボストン大学神学部学部長で、宗教教育が専門の Mary Elizabeth Moore は、その著書『*Teaching from the Heart: Theology and Educational Method*』の中で、現象学に基礎を置く現象学的教育方法を、宗教教育におけるひとつの最も重要な教育方法であるとしている。それは従来の「先生が語り生徒が聞く」というトップダウンの教育方法ではなく、学ぶ者がそれぞれの体験を持ち寄り、またそこで起こるインターアクション (相互作用) を通して、各々の結論を形成するという教育方法である。⁽¹⁸⁾

結果(6)では、「(インタビューの) 質問で、色々な感情や思いが引き出された」「人の言っていることを聞いて、自分の思いとの相違点や、思い出したことや、気がつかされたことが多くあった」「グループのほかの人の話から、教えられたことがたくさんあった」といった意見が多く聞かれた。これはそのような「振り返りの機会 (Moore の語る現象学的教育方法の機会)」を若者に提供することが、ボランティア活動を教育に結びつける上で、欠かすことのできない重要な部分であることを教育従事者に確認させるものであると言えるだろう。

5. 提言

本研究は、震災ボランティア活動に参加した九名の大学生の生の声というデータに基づいて考察されているものであるが、研究者は、研究参加者のボランティア体験のごく一部を垣間見たにすぎない。特に個々の学生の内面的な変化

や、宗教的な変化は、人知を越えた神の導きを通して起こる現象でもあり、そのようなものがすべて表面化され、記録されたわけでもない。さらには、質的研究は、研究者の主観的な判断が多用される研究方法であり、例えば本研究の研究者が、研究参加者の所属する大学の教員であることが、インタビューにおける学生からの返答や、その分析に何らかの影響をもたらしたことも充分に考えられる。繰り返しになるが、質的研究の結果は、量的研究のそれと対比させ、二項対立の図式の中でその優劣が競われるべきものではなく、研究の目的を果たすためにあらゆるデータを活用するというスピリットの中で、説得力を持つ実践的な取り組みの手掛かりとして活用されるべき類のものである。そのような質的研究の特徴と現実をふまえつつ、以下に本研究を通して明らかになった事柄からの、研究者による二つの提言を記し、本研究の結びとしたい。

(1) 日本の社会に様々なボランティア活動の機会が存在する中で、震災ボランティアは、それが必要とされる場所、時期、また内容において、非常にユニークな活動である。特に東日本大震災は、歴史的な被害をもたらした大災害であり、その現場での活動と他のボランティア活動を単純に比較することはできない。本研究で記録された学生の生々しい感情の動きや感想がそれを明らかにしていると言えるだろう。しかし一方で、様々なタイプのボランティア活動が、特に高等教育機関においてその重要度を増しつつあることは事実である。特に近年取りざたされている「サービスラーニング」は、「大学が有する潤沢な知的資源は、大学や研究者、学生だけに占有されるべきではなく、広く地域社会の人々にも還元されるべきである」という大学開放の理念に基づくものである⁽¹⁹⁾。しかし、大学を通して行われるボランティア活動を、「大学生による社会貢献を」という一方のみから捉えるのではなく、ボランティア活動の現場で起こる様々な困難やチャレンジを通して、「社会が学生に成長の機会を提供する」という方向からの視点も重要であると思われる。様々なボランティア活動に共通して、それらが「満足感、達成感の体験」「健康的なセルフアイデンティティ

の醸成」「精神的安定」といったポジティブな結果をもたらすことは、すでに心理学や社会学の観点から頻繁に指摘されている⁽²⁰⁾。またボストン大学の学生を対象として実施された実践宗教倫理の研究では、大学生の倫理的発達に関して、社会倫理の授業を受けただけの学生と、ボランティア活動等を用いた実地体験を授業と併用させた学びを体験した学生では、後者の学生の倫理発達のはるかに勝っていただけではなく、彼らの多くがその後、社会の弱者に対する自主的な活動に積極的に取り組むようになったことが報告されている⁽²¹⁾。加えて本研究で明らかになったように、ボランティア活動が、RanboやFowlerの指摘するような宗教心（または広義の「信仰」）のポジティブな変化や発達を促す経験になりうることを覚えるとき、大学におけるボランティア活動を通じた教育の重要性は、今後特にキリスト教系教育機関によつて再認識されるべきであろう。

(2) 本研究を通して明らかになった研究参加者の具体的な内面的変化に、もし題をつけるとすれば、それは「自己を反省する」、「苦しむ者を思う」、「自分の周りの弱者に目を向ける」といった言葉に集約することができかもしれない。被災者を助けたいという思いから被災地に向かった彼らが直面したのは、想像を絶する苦難であった。その中で彼らの多くは、当初自らが持っていた正義感や同情心を安易であったと猛省しつつ、それでも彼らにできる事を模索した。その中で多くが行き着いたのは、被災者の苦しみを忘れない努力を続けることや、今自分が置かれている場所ですら苦しむ人に目を向けることであった。これらはまさに、キリスト教における人格教育の到達目標の一部である。ボランティア活動によつてのみ、これらを体得することができるということではないにしろ、少なくとも、若者の世界観に大きな疑問を投げかける機会となる類いのボランティア活動は、キリスト教精神やキリスト教世界観を教育する上で非常に有意義なツールであることに間違いはない。キリスト教系の学校のみならず、若者をミニストリーの対象者として持つ地域教会や、若者に特化したミニストリーに関わるパラチャーチ・グループも、同様な活動に積極的に若者を送り出

すべきであろう。ボランティア活動に継続して取り組みつつ、それをそのグループの大切なアイデンティティーのひとつにするような努力は、キリスト者としての大切な成長の機会を、そこに属する若者対して提供するだけではなく、さらに今日特に必要とされている、キリスト者と地域社会との絆を確立し、また深めることにもつながるのではないだろうか。

注

- (1) Michael Quinn Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods* (Thousand Oaks, California, Sage Publications, Inc., 2002), pp.124–127.
- (2) Anselm Strauss and Juliet Corbin, *Basics of Qualitative Research* (Thousand Oaks, California, Sage Publications, Inc., 1998), p.12.
- (3) Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods*, p.247.
- (4) 木下康仁『ライブ講義 M-G-T-A——実践的質的研究法』(弘文堂、二〇〇七年)二〇九–二一六頁。
- (5) 萱間真美『質的研究実践ノート』(医学書院、二〇〇七年)三頁、五一頁。
- (6) Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods*, p.235.
- (7) Ibid., p.342.
- (8) David Gerard, “What Makes a Volunteer?,” *New Society* 8 (1985), pp.236–38.; Louis A. Penner and Marcia A. Finkelstein, “Dispositional and Structural Determinants of Volunteerism,” *Journal of Personality and Social Psychology* 74 (2) (1998), pp.525–37.

- (9) Peggy A. Thoits and Lyndi N. Hewitt, "Volunteer Work and Well-Being," *Journal of Health and Social Behavior* 42 (June, 2001), pp.115-31.
- (10) Lewis R. Rambo and Charles E. Farhadian, "Converting: Stages of Religious Change," in Christopher Lamb & M. Darrol Bryant (eds.), *Religious Conversion: Contemporary Practices and Controversies* (London, Cassell, 1999), p.25.
- (11) Ibid., p.26.
- (12) Steve Fortosis, "The Religious Education for College Students," in Harley Atkins (ed.), *Handbook of Young Adult Religious Education* (Religious Education Press, Birmingham, Alabama, 1995), p.241.
- (13) Naoki Okamura, "Intercultural Encounters as Religious Education: A Phenomenological Study on a Group of Japanese Students at a Christian University in California and their Religious Transformation," *Religious Education* 104-3 (2009), pp.289-302. (和訳題:「異文化体験と宗教教育…カリフォルニア州のキリスト教系大学に在学する日本人留学生の宗教心の変化に関するグラウンデッド・セオリーを用いた質的研究」)
- (14) James W. Fowler, *Stages of Faith* (San Francisco, Harper & Row, 1981).
- (15) Fortosis, "The Religious Education for College Students," p.231.
- (16) Ibid.
- (17) E・H・エリクソン『自我同一性』小此木啓吾訳編(誠信書房、一九七三年)一一一―一八頁。
- (18) Mary Elizabeth Moore, *Teaching from the Heart* (Harrisburg, Pennsylvania, Trinity International, 1998), p.99.
- (19) 志々田まなみ『社会貢献活動と学習活動の融合: サービスラーニング論』(広島経済大学研究論集第三〇巻、第一・二号、二〇〇七年一〇月)四八頁。
- (20) Peggy A. Thoits and Lyndi N. Hewitt, "Volunteer Work and Well-Being," p.118.
- (21) Margaret Gorman, Joseph Duffy, Margaret Heffernan, "Service Experience and the Moral Development of College Students," *Religious Education* 89 (3) (Summer 1994), pp.422-431.